

情熱を傾けて

生徒指導のできる教師に

今、中学校で日々発生する様々な生徒や保護者の問題に授業以上のエネルギーを費やしている教師の姿を見るにつけ、先生方が本来の業務である授業に専念するためにも、教師の生徒指導能力を高めていく必要性を感じます。日本は、いつの間にか学校依存型教育になり、家庭教育を補う生徒指導は困難になりました。

自分を振り返ってみますと、二十代の私は「生徒と接する時間や距離に比例して絆が深まる」ことを信念に、出来る限り生徒と同じ時間を共有して活動しました。授業で生徒と共に汗を流し、放課後は、毎日、プールサイドに立ち、校内持久走大会等の行事でも一緒に走りました。教師が汗する姿や継続的な声かけは、生徒の心に残像となり、いざという時のストッパーになります。体力のある若い年代は、労を惜しまず活動する姿を、あらゆる場で生徒に見せることです。それが、二十代の生徒指導だと思います。

保護者によって違う対応があることを学んだのは三十代でした。ガラスや校舎が壊れ、第二次荒廃期と言われた時期に、私は東部地区の学校で十年間勤務し、その七年間、三年生を担任しました。紙面には書けない価値観の全く違う世界の家庭で育った生徒を受け持つ等の困難もありましたが、心身共に充実し、体力もあつたので、やりがいを感じながら校内人事に応えられたのだと思います。しかし、生徒指導の事例集や学級経営の月刊誌を読んで努力をしても、日々の実践と理論の間で納得がいかないことも多く、研修センターに半年間内留させていただきました。今思うと、三十代は、一学年十四クラスもの大規模校で、毎年違う主任と組織の中で大勢の先生方の判断や行動の仕方を学び、生徒指導は独りの考えで動くのではなく、組織の

一員として指導に当たる、集団の生徒に対しては職員も集団で対応する等、生徒指導の基礎となる生涯の財産を作った時期でした。

三十九歳から四十代前半の私は、西部地区の学校で生徒指導主事を経験しました。早朝、校地・校舎の安全確認後、昇降口に立ち、清掃と挨拶を励行しました。この時期は、覚せい剤等の薬物が、中学生に及び、生徒の顔を知らない警察官と一週間張り込むなど、詳細は掲載できませんが、生涯忘れることの出来ない勤務をしました。県警始まって以来の大事件と報道され、被疑者逮捕で生徒を保護できた時、初めて疲れを感じました。学校だけで解決できない問題は、内々で抱え込まず、関係機関と連携し立ち向かう勇気が大切です。

五十代で私は、南部地区の学校に着任しました。学校経営者は、管理者としての姿勢を色濃く出すのではなく、教育者としての姿勢を実践で示すことが大切だと考えています。鍵は「環境づくり」です。その一つは、職員・生徒一人一人が、力を存分に発揮できる人的環境づくりです。もう一つは、みんなが気持ちよく生活できる物的環境づくりです。私は、できるだけポトムアップできるように朝早く出勤しました。報・連・相の受け入れ態勢をつくり、毎朝、地域の方々や挨拶が交わせる学校周囲の掃き掃除を日課にしました。さらに、学校を変える原動力として、生徒が一丸となって全身全霊を注ぎ込む活動も重要と考え実践しました。（大修館「体育科教育」二〇〇七、四月号に掲載）この四月、最後の勤務校に着任し、焦らず、地道に進んでいきたいと思うこの頃です。

どうぞ、逃げない生徒指導の実践を心がけてください。

過ぎてしまうと早いもので、定年まであと半年になってしまった。実は私は教職に就くまで、いくつもの職を転々としてきている。だから新採の時は、すでに結婚して子どもが二人いた。家内からも「教員もあと何年持つかしら。」と言われていたことを思い出す。しかし、何度か辛い修羅場はくぐったが、一度もやめようとは思わず今日に至った。なぜなのか突きつめて考えたことはないが、きつと目の前の生徒たちがワルをして困らせたり、部活動などで苦しい場面を乗り越え、すばらしい笑顔、そして感動を与えてくれたりしたからであろうと思っている。私は担任の時は学級目標を、そして校長になってからは学校目標を「情熱・挑戦・思いやり」と設定してきた。これは、私が教師になる前、社会人として大事なことは、決して今まで習得してきた知識ではなく、人との関わりの中で「情熱・挑戦・思いやり」が大切と実感してきたからである。

あまり後輩の先生方の参考にはならないだろうが、「情熱を傾け率先垂範していくこと」「決して傲慢にならず謙虚に努力すること」「そして人のため、社会のため貢献すること」、このことが生徒のみならず教師にとっても大切なことだと、私は考えている。それでは、この三つの目標に向かって、具体的に自分が教師として取り組んできたことの中で、力を入れてきたことは何かと強いて言えば、勉強の嫌いな生徒との関わりだと思っている。

中学校においてどんな立場にいてもストレスを感じるのは、非行や問題行動を抱えた生徒や親への対応である。大事なことはこちらから率先して信頼を得るべく、関わりを持つていくことである。逃げずに関わりを持つていく中から、今、何を欲しているのかがつかめるはずである。そして自己実現のため、援助していくことを約束し、目に見える形で実行していくことが大事かと思う。

私が今までに携わってきたのは、自宅に呼んでの宿泊。一緒に山遊びや川遊びをすること。野菜の栽培や木製ベンチなどを製作し、社会貢献をすること。夜、家庭訪問をするか私の自宅か、学校かで一緒に勉強をすること。また、こうしたことのできる教員の輪を広げていくこと等々。教員数の加配が難しい中であつては、信頼できる地域での支援者や学生ボランティアの援助をいただいていた。関わった全部がうまくいったとは思っていないが、中学校を卒業してからも、今度は私を助けてくれる子がいるのは何とも楽しい。

さて、中学校に勤務して感じることは、学習指導ももちろん大切ではあるが、より以上にきめ細かな生徒指導が大切だということである。勉強さえできれば、自分さえよければの考えがはびこる今の世の中である。貧弱な心しか持たない頭でつかちではだめなのである。

私たちは、ノーベル賞受賞の田中さんのような優秀な人材を育てることばかりが目的ではない。勉強はできるに越したことはないが、それはほどほどでも、人から愛され、喜ばれ、そして信頼され、将来世の中を、自分の足でしっかり歩いていける生徒に指導していくことが必要と確信している。

いつも心に「情熱・挑戦・思いやり」を忘れずに。

第一ステージを終えるにあたって

私たち「団塊の世代」は第二次世界大戦後に生まれ、激動の戦後日本の歩みと共に生きてきた。経済、政治、社会もここ六十数年で激変した。教育界も戦後大きく変化した。高校進学率の上昇、偏差値の登場、受験戦争、落ちこぼれ、校内暴力、ゆとり教育、学校週五日制、学級崩壊、不登校、いじめ等々の言葉は、戦後教育界が経験した歴史である。

私は、子どもたちに学ぶことの楽しさと子どもたちの夢を育む仕事に憧れ、教師の道を選んだ。しかし、現実には楽しさと同じくらい苦勞を経験した。

一九六八年、日本のGNPがアメリカに次いで世界第二位になり、大量生産、大量消費の時代に入り、高学歴志向が高まった。これに照応して、教育内容も「より高度で抽象的な思考」を求めるものに変更された。高校進学率が急速に伸び、生徒の質も多様化し、家出、シンナー、暴走、校内暴力といった非行に走る生徒が急増した。私は当時、担任と生徒指導主事を任せられていた。特に、家出生徒の問題、暴走族といわれた若者に同調する生徒の扱いには苦慮した。これらの生徒は家庭や外部とのつながりが大きな障害となった。「真の人間関係とは」といった根本的な話をしたのもこの時代であった。家出した生徒は、長期欠席のおそれがあつたため、あらゆる連絡網を駆使して探しだした。そして、その生徒とは納得するまで話し合いの時間を持つと同時に、家庭訪問をし、生徒の家族とも、何度も、何度も話し合いを持った。このことから、家庭と学校、外部の関係機関の連携の大切さを学ぶことができた。

大きな問題となった校内暴力の解決策を探つたのもこの時期である。これらの現象は学力不振に端を発するケースが多く見られた。私は最初に、担当教科である保健体育の授業を変えた。

個々の運動能力を重視するのではなく、グループの中でどれだけ自分を生かしているかを重視するようにした。具体的には、真面目な授業態度、努力、積極性、協調性等を重視し評価した。また、教科外では部活動を重視した。放課後自分の居場所がない生徒が、問題行動を起こす傾向をとらえ、部活動への参加を積極的に呼びかけた。日常の練習、土曜、日曜の練習試合を通して、生徒同士のコミュニケーションを図るよう工夫した。勝敗だけにこだわらない対外試合は、生徒の意識を変え、効果をもたらした。

一九九八年の学習指導要領の改訂では、「心の教育」「自分探し」「生きる力」「総合的な学習の時間」「授業内容の三割削減」などが学校現場に導入された。従来の学力偏重から脱却を図るといふ点では歓迎すべき改訂であった。「総合的な学習の時間」については試行錯誤の繰り返しであったが、新しい授業形態を生み出すことが出来た。即ち、「生徒を教えるのは学校の教師である」という概念を根底から変えることになった。地域の人たちが生徒の指導に関わるようになったのである。私は、生徒の地域社会でのボランティア活動を積極的に推進している。また「ものづくり」の大切さ、楽しさを学習させる一環として、農業のプロに野菜等の栽培方法の指導をお願いしている。

今年の六月に学校教育法が改正された。「副校長」「主幹教諭」「指導教諭」などの職が設置されることになる。しかし、いつの時代でも教師に求められるのは、子どもの健全な成長をはかるための努力を怠ってはいけないことだと思ふ。そのためにも、日ごろの自己研鑽が求められる。これからの先生方にこのことを期待したい。

轍は遺ったか

唐突ではあるが、結論から先に述べさせていただきます。

職務は選ぶべきものではなく、賦与されるものであるということ。自分の適性に叶った仕事、職務などある筈もない。ひたすら、今この時こそ大事と心得る以外道はない。結論、「与えられた仕事を懸命に努めよ。」である。

初任校は母校であった。ひたすら、子どもたちと土日も放課後もなく遊んだ。学力テストがあれば、他のクラスに負けたくない、できるようになるまで残して指導した。学級対抗球技大会は、勝つことにのみ集中した。図工の作品も作文もであった。まさしく、学級王国であった。二年目から体育主任。町内対抗の陸上、水泳大会、学校毎に点数がはじかれた。そんな年、インフルエンザの流行、散々な結末。恩師である指導主事から追い打ちが掛かった。「お前何やってんだ。」この一言が、日本水泳連盟や県水泳連盟の学童水泳優秀校をもたらした。乱暴で荒削りな指導の連続と反省しきりではあるが、教師として最も楽しい時代であった。

校長から一通の書類を渡され、やってみないかの薦め、在外教育施設での仕事であった。久しぶりの受験勉強、面接では水泳指導のことを聞かれた。赴任先はバンコクであった。

熱風のタイ王国は、年数回のクーデターと首都バンコクを襲う洪水、治安の酷さは、危機管理の域を超えた状況であった。更なる課題は、タイ国教員免許取得のための試験である。幸い合格し強制送還は免れた。

保護者の現地勤務の期間は概ね三年、児童の転出入も同様、国内同様の学力の保持と海外ならではの体験が求められる。異なった環境下で教材開発の苦闘が続いた。頼らず自ら動く、直

ちにやらねばならぬことを自らに課し続けた三年間であった。

帰国、再び母校に赴任。体育主任は後輩が担っていた。苦渋の自分探しの旅が始まった。研究教科を算数に絞った。教材を研究し単元計画を組み換え、学習活動を創り出す。指導案を何度も書き換え実践検証しまとめる。これを繰り返して同好会に持ち込んだ。県内各地の先輩教師は、厳しく指摘し後の酒席で優しく励ましてくれた。こんな日々が続き、実践事例集も出版された。関プロ大会では、四年連続発表の機会をいただいた。内地留学の機会もいただいた。

折しも、新学習指導要領に生活科新設の話題が上り始めていた。研究したいとの思いが通じ、町指定の研究校となった。告示前の学習指導要領のこと、生活科の名称は使用不可の状態の研究が進められた。同僚の意欲は旺盛そのもの、ありがたいの一言に尽きた。

町教委の指導主事となり、私に課せられたのは同和教育である。先輩指導主事の足跡を追った。町内六校の同和教育推進の方向を誤らぬために、また同和教育の解消にも関わることにあった。行政交渉は厳しいものであった。行政の職務遂行の手法の違いを目の当たりにした。

教頭職を三年、校長として九年、三校目となった。学校のトップとして、あらゆる状況に直面した。危機を体験し大概のことには動じないとの自負、慢心が最も恐ろしいと肝に銘じたい。残すところ一年有余、今、特別支援教育は喫緊の課題、個への指導と集団への指導の調和を図らねばならない。事上錬磨、事に臨んで己を磨く。二〇年近く座右に置いた書物「言志四録」「百朝集」「菜根譚」まだまだ、手放せない。

学校栄養職員としての食への取り組み

給食室の新築、調理業務の民間委託、給食研究会の事務局長等々、多様な取り組みがあり、気がついてみると本校勤務も十九年目を迎えていました。これらの取り組みの中で気付いたことを振り返ってみたいと思います。

一つ目は、給食指導と生徒指導の密接な関係を痛感してきたことです。つまり生徒が乱れてくると給食指導も乱れ、生徒が良くなると給食指導も充実してくるということです。この点を重視し、五年前から「給食時における生徒指導の充実」を前面に揚げて、教師との関わりを大切にしつつも、全職員の役割分担を明確化し、指導を進めてきました。校長、教頭に自分の思いを具申し、職員の協力的体制作りには、強力なバックアップもいただきました。その結果、給食委員会の活性化をはじめ、給食当番の身支度の徹底、迅速な活動、クラスの協力的体制が定着してきたのです。その結果、生徒のみならず全職員の食への関心が高まり、副産物として給食の残量の著しい減少につながりました。改めて組織の偉大さに気付かされています。

二つ目は、献立作りの重要性です。食事が健康の土台であるならば、献立は、給食指導、食育の土台となることを確信したからです。ここをしつかりおさえておけば、職員からの信頼、食育、衛生管理、調理指導等、次のステップが、とても楽になるはずですが、そこで忘れてならないのが和食への取り組みです。日本には古くから「主食・主菜・副菜・汁」という伝統的な食事形態があります。この食文化をぜひ継承していただきたいのです。世界の人々が認めている和食のもつ素晴らしさを日本の子どもたちに伝えていただきたいのです。ともすると、児童生徒が好んで食する欧米化の食事内容に陥りやすい傾向がみられますが、和食の良さを追求し、

提供していくことで、児童生徒との接点が見えてくると思います。私は和食の献立と洋食の献立の栄養面での比較をグラフにして、機会あるごとに話をしてきました。すべての献立に該当する訳ではありませんが、不足しがちなミネラル分がとれること、脂質が押さえられること、主食である米の素晴らしさなどをアピールしてきました。特に、生徒の好きな味付けにしたわけではありませんが、煮物であれば、和えものであれば自然と食べるようになりました。これも指導できる環境、体制作りが定着したおかげと実感しています。もう一つ、給食を提供する上で忘れてならないのが、食べる側の評価です。どんな方法でも良いと思いますが、私はクラスの給食日誌を通して生徒からの評価を受けています。味、量、献立内容など、気付いた事を思うままに記入してもらっています。これは評価に留まらず、生徒と栄養士、生徒と調理員のコミュニケーションにも役立つことを期待しての実践です。

三つ目の食への取り組みは、「人はなぜ食べるの」「何を食べたらいいの」「どのように食べたらいいの」こんな基礎基本を含めて、生徒の実態に即した指導を行うことです。欲張らずその年にやりたいこと、できることを重点目標とし、それでいて単発的なものでなく、次年度に継続できることを心がけているのが現状です。本校では、一食分の食事を考えさせ、修正し、クラス献立を作る授業を行い、その献立を給食に導入することが、恒例の行事となっています。

思うがままに経験を述べてきましたが、参考になるか不安です。栄養教諭制度が確立された今、食のアドバイザーとしての知識を豊かにし、「自分の健康を考えた食事ができる子ども」を育てていただきたいと願っています。

退職を前に思うことなど

今回のこの企画で、団塊の世代のメッセージを書くことになった。団塊の世代だからといって、他の世代の人たちと特に変わった経験や考えがあるはずはないが、退職を前に、思うところを記してみた。

教師生活三十有余年を通して、数えきれぬほどの子どもと向き合い、様々な行動を共にしてきたが、今でも交流がある教え子は、部活動を共にした子どもたちである。私は、ずっとサッカー部一筋で、一番熱心だったのは、二十代後半から三十代後半にかけてであった。その間、それこそ家庭も顧みず、サッカーのシーズン中は、休みといえば指導に明け暮れていた。詳しい年は忘れてしまったが、その頃、国民体育大会の栃木大会が、宇都宮市を中心に開催され、県の陸上競技場での開会式に、小学生のボールリフティングがアトラクションとして披露されることになった。私の指導するサッカー部にも十人の割り当てがきたので、日曜日ごとに、補欠を含めた十数名の児童を連れて、宇都宮まで通ったものである。往復の電車の中で子どもたちとの交流もとても楽しく、いい思い出になっている。開会式当日の華やかさとともに、子どもたちにとっても私にとっても、サッカー人生の一つのハイライトであった。

部活動の良さの一つは、教師と児童が、年齢差や立場を超え、同じ目標に向かって連携できるところである。勝つて共に喜び、負けて共に泣き、ともかく子どもたちと思いを同じにして、一つの目的に夢中になれることが、スポーツの素晴らしさであろう。部活動を共にすると、子どもたちとは人間対人間の付き合いができ、互いの心の結び付きがぐっと深まるものである。そして、このことは、児童指導や教科の指導でも大いに役立ち、教師としての指導力の向上にもつながるのである。

当時サッカーを指導した子どもたちは、今では、ほとんどが良きパパになっているが、今でも時々集まって、旧交を温め合いながら、サッカーの思い出話に花を咲かせて、楽しい時間を過ごしている。この子たちとの交流は、私の教師としての大きな財産である。近年、スポーツ少年団への移行に伴い、部活動を指導していない若い教員が増えているが、部活動の素晴らしさを知ることができないのは、教師として不幸ではないかとも思っている。

夢中になってやってきたことといえば、私にはもう一つある。それは、英会話の学習である。小学生の頃から、近所の教会で開かれる英語教室に通ったおかげで、もともと英語は得意で、高校生の頃には、教会を訪れる外国人と多少は会話ができたものである。ところが、教員になって何年か過ぎたある日、外国人と会う機会があつて、話をしようとしたのだが、まったく英語が口から出てこないことがあつた。大学の後半からの英語学習のブランクが、いかに大きかったかを思い知らされ、ショックであつた。その後、何か一つ外国語が話せるのも人生を豊かにするものと思ひ、再度英会話の学習を始めて現在に至っている。今は日常会話程度なら自由なく話せるようになった。

以前は、自分の英会話が、学校で役立つなど思ってもみなかったが、小学校でも英語の学習が盛んになるにつれて、A L Tとの打ち合わせや、カリキュラムへのアドバイスなどで、私の英会話が、少しは重宝されるようになってきた。今後も特技として学習を続け、先生方や児童への刺激になれば良いと思っている。